1935年にシャムが日本に象を贈った経緯と目的
－ボーイスカウトにおける国際交流の一事例－

圓　入　智　仁

The Process and Purpose of the Presentation of Two Elephants to Japan by Siam in 1935: A Case Study of International Exchange through the Boy Scouts Movements

Tomohito Ennyu

（2013年11月27日受理）

1．はじめに

1943年，上野動物園にいた象の「はな子」が他の猛獣などと共に，東京都長官の指示によって処分されることになった。はな子は同年８月25日に絶食を始め，９月11日に死亡した[1)]。さらに前年の１月20日，大阪の天王寺動物園にいた象の「ランプーン」が，不良な飼料に起因する胃腸炎や栄養不良により死亡していた[2)]。このように当時，日本各地の動物園で多くの動物が死亡したことは一般に知られているが，これらの動物が動物園に入った経緯は，これまであまり関心を持たれてこなかった[3)]。

第２次世界大戦終戦時，日本には東京，京都，大阪，鹿児島，名古屋などに動物園があった。これらの動物園は，日本内外から多くの動物を受け入れていた。その由来は動物商からの購入，海外の動物園との交換，皇族からの下付，華族や軍人などからの寄贈，外交ルートによる動物の受け入れなどであった。本稿で検討する象のはな子とランプーンは，シャム（現在のタイ）のルークスア（ボーイスカウトの現地語表現）から，少年団日本連盟に寄贈され，実際には上野動物園と天王寺動物園が飼育した象である。

少年団日本連盟や上野と天王寺の両動物園による，はな子とランプーンの受け入れについては圓入が詳しく検討している[4)]。それによると，少年団日本連盟は象の受け入れに当たって輸送費などの資金提供をしなかったため，シャムと日本の実質的な授受の交渉に加わらなかった。ただ，両動物園で行われた象の授受式は，形式的に，シャムのルークスアが日本の少年団に，そして少年団が両動物園に象を寄贈することにした。さらに圓入は，両動物園が象を受け入れるために設備を増改築したことと，シャムからの象使いを受け入れたことも明らかにしている。これらの検討は，あくまで象を受け入れる側に着目したものであり，送る側の意図は看過している。

さて，戦前には本稿で扱う象の他にも，1888年に15歳のオスとメス各１頭の象がシャムのラーマ５世チュラーロンコーン王（1853-1910，在1868-1910，以下「５世王」と表記，他の王も同じ）から日本の皇室に贈られ，1931年にはエチオピアの皇帝が日本の皇室にライオンを贈った。これらはいずれも，上野動物園が受け入れている。このような外交ルートによる動物の授受には，贈る側に何らかの意図があると考えられる。

これまで，近現代における日本とシャム（タイ）の交流については，政治や経済，国際関係などに関する数多くの研究が進められてきた[5)]。その中で西野は，1928年から1936年まで在シャム日本公使だった矢田部保吉の実績の１つとして，両国のボーイスカウトの交流を挙げている[6)]。チャルンパッタナーは当時の日本の英字新聞に依拠しつつ，1932年の立憲革命によって政治の主導権を握ったエリート集団が，それまでの専制君主体制とそれを支持するシャム国内や西洋の勢力に対抗するため，日本に接近しようとしたことを指摘し，その一環としてルークスアが日本の少年団に象を２頭寄贈したとする[7)]。

戦前の日本の少年団は，世界規模のボーイスカウトの大会や国際会議に代表団を派遣していた。本稿で検討するシャムのルークスア，米国の日系人の

別刷請求先：圓入智仁，中村学園大学短期大学部幼児保育学科，〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1
E-mail：ennyu@nakamura-u.ac.jp

ボーイスカウト，満州や朝鮮の少年団，そしてドイツのヒトラー・ユーゲントとの交流の実績もあった。

ドイツとの交流に関しては，1938年から1941年にかけて行われた日本の青少年団とヒトラー・ユーゲントとの相互訪問に関する研究がある[8]。それらによると，1938年，日本とドイツの各30名が相互に訪問した。ヒトラー・ユーゲントは1938年を諸国民の青年との相互理解の年として，他国の青年に第三帝国を理解させること，ファッシズム反対運動に対抗すること，ドイツの青年が他国の文化と接して，自国の理解を一層深める機会にすることを目指していた。日本側は，日本の青少年団体の連携を促すこと，国体の歴史と民族の伝統による国民的精神の形成を示すこと，東洋文化の推進力あるいはアジアの中心勢力としての日本を理解させることを目的としていた。

1940年には２度目の相互交流が計画され，ドイツからの派遣団は1940年10月に満州を訪問し，朝鮮経由で日本本土に来た。彼らの来日の目的は，日本の文化や精神に接することと，青年団や少年団との交流であった。このようなヒトラー・ユーゲントとの交流は，後述する少年団日本連盟と帝国少年団協会という２つの少年団の全国組織が併存し，かつ，1941年に男女青少年団の統合直前に行われたものであり，ヒトラー・ユーゲントの組織が日本の男女青少年団の統合に影響を与えたことを先行研究は指摘している[9]。

ドイツとの交流の前に，少年団日本連盟はシャムのルークスアと交流していた。1929年にシャムから21人が来日し，1931年にほぼ同数の日本の少年団員がシャムを訪問した。その後，1934年には少年団日本連盟の練習船が東南アジアを一周航海する途中にシャムに寄港した。翌1935年，本稿で扱う通りシャムから象が贈られ，1937年にはその答礼として日本の少年団がシャムに渡航した。同年，ルークスアの指導者が日本で少年団による指導者訓練を受けるために来日した。一連のシャムとの交流について，『日本ボーイスカウト運動史』が年表に記すほか[10]，1934年のシャムへの寄港は圓入が経緯と内容を論じている[11]。後者によると，シャムに寄港した日本の少年団員は過去の交流を意識していたが，シャムを英国，米国，フランス等の植民地と並ぶ寄港地の１カ所として捉えていた。

動物園の歴史に関しては，各動物園の記念誌などの書籍がある。これらは園内における動物や施設設備や職員などに関する記述が中心である[12]。動物外交の研究は発展の途上であり，「パンダ外交」の歴史を検討した家永の研究は，その先駆けとなる成果である[13]。

以上の先行研究を踏まえ，本稿では，1935年にシャムのルークスアが２頭の象を日本の少年団に贈った経緯と，そこから読み取れる寄贈の目的を明らかにする[14]。そのため，まずシャムのルークスアと日本の少年団それぞれの成立，組織や活動の概略について，そして相互の交流について述べ，その後にシャムから日本へ象の寄贈に関する打診，シャムにおける象の選定と運搬，象の寄贈に対する日本からの返礼，そして本稿で扱う象の授受に関する新聞報道に着目する。

2．シャムのルークスアの成立と展開[15]

英国発祥のボーイスカウトをシャムにもたらしたのは，６世王（1881-1925，在1910-1925）である。彼は1893年から1902年まで英国の陸軍士官学校やオックスフォード大学などで学んだ。この間の1907年，英国におけるボーイスカウトの創始者ベーデン＝パウエルは子どもたちを集めて実験キャンプを行い，翌年に『少年のための斥候術』（"*Scouting for Boys*"）を出版した。留学中の1895年に王太子となった６世王は，1903年にシャムに帰国した。６世王は1905年頃から小姓たちを動員して「戦争ゲーム」を始めた。このゲームの目的は，自らの側近作りだったと言われている。

1910年10月，５世王の死去に伴い６世王が即位した。1911年５月には正規軍とは別に小姓たちを動員した大人の「スアパー」を結成し，７月には，近習学校で子どもの「ルークスア」を結成した。いずれもボーイスカウトに範をとったスアパーとルークスアは，その後，各地で結成が相次いだ。それらの活動に，６世王は，自らへの忠誠心の涵養を期待した[16]。このことは，公定ナショナリズムの一例として議論されている[17]。1913年にルークスアは初等教育や中等教育の選択科目になった[18]。さらに1921年，ルークスアが14-16歳の男子の中期中等教育の必修科目となり，初等教育５年間（中等教育に進学する場合は３年間），前・中・後期中等教育の合計８年間を通しての課外活動にも位置づけられた[19]。

1925年に死去した６世王を継いだ７世王（1893-1941，在1925-1935）は，５世王以来の重臣を重用し[20]，６世王時代に膨らんだ負債の処理に取り組んだ。その過程で，スアパーを解散した。その一方で，ルークスアと，その学校教育における位置づけは存続させた。

1932年の立憲革命後の機構改革により，ルークスアはそれまでの国王直属の組織から，文部省体育教育局ルークスア部，海洋ルークスア部，一般訓練部に位置づけられた。1935年に７世王が退位して８世王（1925-1946，在1935-1946）が即位した。この間，ルークスアは既述の通り日本の少年団と人的な交流を行い，米国や世界規模のボーイスカウトの大会に現地の留学生を参加させるなど，国際的なつながりを保っていた。1943年には国防省管轄下に青年の「ユワチョン・タハーン（軍青年団）」が設置された。少年のルークスアは文部省体育教育局の管轄下で存続したが，その資産は軍青年団に接収された。

以上の通り，シャムのルークスアは６世王が開始し，学校教育に位置づけられた。立憲革命後は文部省の一部局となり，第２次世界大戦下の軍国主義体制に組み込まれていった。

３．日本の少年団の成立と展開[21)]

1900年代初頭の欧州に留学や駐在していた日本人がボーイスカウトの組織や活動を日本に紹介し，あるいはベーデン＝パウエルが著した『少年のための斥候術』を日本語に翻訳して，日本にボーイスカウトが伝播した。1910年代には日本各地でボーイスカウトの影響を受けた少年団が結成された。これらの連合組織として，1922年に少年団日本連盟が発足する。加盟団の多くは，地域の篤志家が指導者となって希望する子どもを集めて少年団を結成したが，学校の教職員が指導者となり学校単位で結成した例や，篤志家が町内や村内の子どもを網羅的に組織した例などもあった。

1932年に文部省が訓令「児童生徒に対する校外生活指導に関する件」を出して，団の事務所を学校に置き，団長は学校長が務める，いわゆる学校少年団の組織化が進んだ。同時に学校少年団の全国組織発足の準備が始まり，帝国少年団協会として1935年に発足した。これ以降，少年団日本連盟と帝国少年団協会が併存することになる。

1940年，文部省は大日本青年団，大日本連合女子青年団，大日本少年団連盟（1937年に少年団日本連盟から改称），帝国少年団協会，大日本海洋少年団（1938年に大日本少年団連盟から分離独立）を集めて，男女青少年団体の統合を提案する。同年末までに大日本海洋少年団を除く４団体が，それぞれの解散と新団体の発足に合意した。翌1941年１月に，大日本青少年団が発足した。

このように，日本では英国のボーイスカウトの影響を受けた少年団とは別に，独自の活動理念を持つ少年団や，文部省の主導による学校少年団などがあった。戦時下の体制が確立する中で，大日本少年団連盟（少年団日本連盟）は1941年に解散し，従来の少年団は学校少年団へと改組された。

４．シャムのルークスアと日本の少年団の交流

1929年，少年団日本連盟はシャムのルークスア18名と指導者２名を日本に招待した。さらにシャム側の費用負担により，指導者が１人加わった。彼らは７月28日，神戸港に入港して大阪，奈良，京都，名古屋を訪問し，８月７日に東京に到着した。８月９日からの１泊２日は山梨で開催されていた東京連合少年団の野営に参加した。８月10日に東京に戻り，横須賀を訪問した後，８月12日に横浜から船に乗って帰国した[22)]。

この時期にシャムを招待した背景について，上野動物園で象を受け入れる授受式で配布されたと思われるパンフレットには，「昭和四年の春のことであった。少年団日本連盟で暹羅の少年団を招ばうといふ話が起り，時の暹羅協会理事長大倉男爵に相談すると男爵は非常に賛成され，費用を提供して援助しようといふことで招待の話は直ちに成立した。そこで，連盟理事三島子爵は，急遽時の駐日暹羅公使と交渉を開始し，両国間に同年夏期に暹羅少年団二十一名の来訪を得ることに決定した。」との記述がある[23)]。なお，文中の「大倉男爵」とは，大倉財閥の総帥，大倉喜七郎である[24)]。少年団日本連盟は同年４月９日，東京のシャム公使館を通じて招待状を発送した。それには，連盟が暹羅（せんら）協会（シャム協会），東京日日新聞，大阪毎日新聞の「充分なる援助により」，指導者を含めたルークスア20名に必要な経費の全額を負担して招待すると記されていた。その目的は「日暹両国の少年に親交の機会を与ふ」ことで，「暹羅少年団と日本少年団と一層親密な連係を作つて相互の友誼と諒解とを増進することを望む」としていた[25)]。

少年団日本連盟の連盟長二荒芳徳と理事三島通陽は，1935年の時点で暹羅協会の理事を務めており，1927年設立の同協会に1929年当時から関わりを持っていたと思われる[26)]。同協会は大倉喜七郎が中心となって設立したものであり[27)]，1929年にルークスアが訪日した際の旅費5,000円は，大倉財閥の大倉組が負担している[28)]。

この訪日の後，1930年５月26日付で，「暹羅少年団理事長タニー」からバンコクにある日本公使館の谷田部公使宛てに，1931年１月にシャムで開催

されるルークスアの全国大会に日本の少年団の代表を招待したいとの連絡があった。これは1929年の訪日に対する返礼であり，シャムのルークスアの長を務める７世王による「両国少年団ノ相互交換カ両国々交親善ノ増進ニ資スルコト多大ナルヘシトノ思召」があったという[29)]。

1930年12月18日に16名の少年団員と５名の指導者は神戸港を出港，香港を経由してシンガポールに入港し，汽車でバンコクを目指した。翌年１月３日，バンコクに到着してキャンプ場に入った。７日までの間にバンコクを見学するなどして過ごした後，アユタヤを見学し，13日にバンコクを発ってナコーンパトムを経由し，16日にシンガポールに着いた。同地を18日に出港し，30日に神戸港に帰ってきた[30)]。

以上の日本とタイの往来，1932年のシャムにおける立憲革命，1934年９月上旬の少年団日本連盟の練習船による東南アジア一周航海の途中のシャムへの寄港を経て，本稿の主題である日本への象の寄贈が進められることになる。

５．シャムから日本への象の寄贈に関する打診

日本に象を贈るきっかけは，1934年６月に第９代在日シャム公使として赴任するプラ・ミトラカムラックサー（欽賜名，本名はナッダー・ブンナシリ）が，赴任前にルークスアを所轄していた文部大臣と交わした会話にあるという[31)]。シャムによる日本への象の寄贈について，ルークスアを管轄していた文部省体育教育局ルークスア部は部長名で，次の文章を発表している[32)]。

> 1929年の訪日の際，資金面を含めて日本が便宜を図ってくれた。日本の少年団や教育の視察は，帰国後のシャムのルークスアや教育に大いに役立った。日本の少年団とシャムのルークスアは長い間の友人である。相互の団結と，思い出のために，慶事の際には互いに贈り物をしている。このたび，ルークスアが所有する象が多くなったので，シャムのルークスアはシャム国内で一番大きい動物である象を２頭，大阪にはメスの象を，東京にはオスの象を贈ろうと考えている。

この文章には日付が記載されていない。おそらく，シャム側からバンコクの日本公使館に象の受け入れに関する連絡が入り，それを在シャム宮崎代理公使が東京の外務省に伝えた以下の文章の日付である1934年４月14日以前のものであろう[33)]。

> 暹羅「ボーイ，スカウト」ハ先年本邦ニ於テ受ケタル好遇ニ対シ謝意ヲ表シ兼ネテ両国間友好関係ノ象徴トシテ立派ナ牙ヲ有スル当国産象ヲ「スカウト」ノ預金ニ依リ購入シテ東京，大阪ノ動物園ニ各一頭宛寄贈シ度希望アルモ本邦側ニ於テ之ヲ受クルヤ否ヤ其ノ内意ヲ知リ度旨「プラ，ミトラカン」ヲ通シテ当方ニ照会越シタリ

1929年のルークスアの訪日，1931年の少年団の訪シャムを念頭に，シャムのルークスアが両国の友好関係の象徴としてルークスアの加盟員の預金から資金を拠出して象を購入し，東京と大阪の動物園に寄贈したいとの内容であった。この連絡には続けて，象の買い入れ費用とバンコクまでの運搬費用として，約２万「チカル」を集めることができそうだが，バンコクから日本までの船賃の支出が困難であることと，シャム側は日本まで象使いを同行させたいことの記述があり，その上で，東京と大阪の両市は寄贈を受ける意向があるのかの確認を求めている。「プラ，ミトラカン」とは，この連絡後の６月に東京のシャム公使館に着任するプラ・ミトラカムラックサー公使である。1935年３月の為替相場で，１チカル（バーツ）は１円36銭程度であり[34)]，２万チカルは約２万７千円となる。

東京の外務省は少年団日本連盟に1934年４月20日付で連絡を入れた[35)]。連盟から東京と大阪の両市にこの件を口頭で伝え，「大体了解ヲ得」た[36)]。連盟は外務省が両市に口添えすることを希望しており，外務省は５月３日付で大阪市に電報を打ち[37)]，４日に東京市役所を訪問した。大阪市は４日に外務省へ受け入れの返事を出した[38)]。東京市保健局公園課公園掛長春見一夫掛長も，４日の外務省担当者の訪問時に受け入れの返答をした。

こうして２頭の象が上野と天王寺の動物園に入ることになったが，それはシャム側の意図であった[39)]。東京と大阪に贈ることで，「他の如何なる場所に於けるよりも，より良好なる取扱を受けるのみではなく，また日本と暹羅国との友好的関係をより多くの日本の小国民たちに知らしむることが出来る」とのことだった。

シャムが贈り物に象を選んだ理由には，象がシャムにおいて象徴的な存在であることが考えられる。現在のタイの国旗は赤，白，紺，白，赤の５本の横帯からなる三色旗だが，軍艦旗としては三色旗の中央に赤丸が配され白象が描かれている。歴史を遡ると，1855年に４世王（1804-1868年，在1851-1868年）が赤地に白象を描いた国旗を採用した[40)]。1916年には６世王が国旗を赤，白，赤，白，赤の二色旗とし，翌1917年には現在の三色旗になった。

象の授受式で配布されたと思われるパンフレットには，シャムの象について，「暹羅の善男善女は，象を仏陀の前身として崇め尊ぶ風がある。斯様に象は一般民衆から崇拝せられるのみでなく，又国家の法律に拠りて保護せられることが厚い」との記述がある[41)]。

６．シャムにおける象の選定と運搬

1934年５月８日と同月11日，外務省はバンコクの日本公使館に東京と大阪両市の動物園が象を受け入れることに加え，既に述べた各動物園からの要望を伝えている[42)]。これらがシャムのルークスアに伝わり，実際に象を選定することになる[43)]。

シャム側は，日本からの回答を得て，資金調達を始めようとしたのであろう。５月14日，バンコクの日本公使館から日本の外務省に，シャムの「各地少年団は既に中央より預金方の命令を受け居る」との報告があった[44)]。プラ・ミトラカムラックサー公使の日本への着任後，恐らく６月中旬に少年団日本連盟の奥寺龍渓主事が面会した[45)]。その報告によると，シャムでは象の購入と運搬費について「目下至急寄付金募集中」であるという。

同年７月16日，バンコクの矢田部公使から東京の外務省に，シャムにおける準備についての連絡が入った[46)]。ここで，シャムのルークスアはバンコクから400キロ離れたピサヌロークでメス象２頭を探していること，鉄道輸送が困難なためバンコクまで徒歩で移動するが，雨期は歩行が困難で，しかも雨期が終わる12月以降に象が「精神異常」を呈すため，象をピサヌロークからバンコクに移動させるのは来年３月に入ってからになることが伝えられた。さらに７月21日，矢田部公使が東京の外務省に詳細を郵送している。８月23日に外務省に到着したそれには，矢田部が７月16日にルークスアを所管している文部省体育教育局長「ルアン，スープ」の訪問を受けて，次のことを伝えられたという[47)]。

> ピサヌロークからバンコクまでは鉄道が敷設されているが，象を輸送するためには特別貨車を用意する必要があり，それには莫大な出費を要す。シャム側としては象使いの引率により徒歩でバンコクを目指したい。ところが，ピサヌロークからバンコクまでは道路が整備されておらず，２頭の象は田野を歩くことになる。11月までの雨期，ピサヌローク周辺は絶えず川の氾濫があり，そうでなくても耕作中の米田を歩くことはできない。雨期明けから翌年３月頃までは象が凶暴になるので，結局，ピサヌローク出発はその３月頃になるだろう。バンコクまでの間，１ヶ月半から３ヶ月程度を要する見込みであり，バンコクを出港するのは1935年６月以降になるだろう。

シャムの道路事情，気候に加えて，象の性質が影響して，象のシャム国内の輸送が１年後になってしまうという[48)]。日本側は，早ければ1934年５月24日もしくは６月20日にバンコクを出港する大阪商船の船による輸送を検討していたが[49)]，これは的外れとなった。

矢田部公使が東京の外務省に郵送した書類には，シャム側がピサヌロークで以下の４頭のメス象を確保していることを記している。

> 象Ａ，雌，生後20年，高さ2.13メートル
> 象Ｂ，雌，生後25年，高さ2.18メートル
> 象Ｃ，雌，生後24年，高さ2.25メートル
> 象Ｄ，雌，生後24年，高さ2.23メートル

４頭の象のうちシャム側はＡとＢに○印をつけ，「最モ寄贈ニ適当スルモノト思惟ス」としていた。上野と天王寺の動物園によるメス象という要求は叶ったが，天王寺動物園が期待する身長５尺（約1.5メートル）を超える象が提案された。この提案に対する日本側の反応や，最終決定に関する記録は残っていない。後に象が来日した際，その名前や身長などを新聞が次のように伝えている[50)]。

> バンジー嬢は芳紀まさに廿歳，身長八フィート，巾四フィート，体重二トン七，ざつと七百貫で東京聯合少年団の手で上野動物園に，またランプーン嬢は十八歳で，巾四フィート，身長七フィート半，少し瘦形で二トン一，大阪少年団で貰ひ受け大阪動物園にそれぞれ託され日本の少年少女とお馴染になつて日暹親善に尽くすことになつてゐる

８フィートは約2.4メートル，7.5フィートは約2.25メートルである。この情報と，シャムから伝えられた４頭の象の情報には年齢と高さについて差が生じている。シャムから伝えられたもの以外の象が来た可能性もある[51)]。

タイの公文書には，２頭の象がサワンカローク県から来たとある[52)]。サワンカローク県はピサヌローク州の一部であり，後にスコータイ県の一部となる。２頭の象は２月１日に当地を出発した。バンコクに着くのは３月３日を予定していた。到着日は確定できないが，３月29日までにはバンコクに到着していたようである[53)]。これら日本に来た象の名前は，シャム語（タイ語）読みでは「ワンディー」（「良い日」の意，上の引用では「バンジー」となっている）と，「ランプーン」（シャム北

部の地名）であった[54)]。

２頭の象の東京と大阪への配分は，シャム側が決めてほしいとの要望が両市から出た。到着後好都合であり，かつ，輸送途中の病死など事故の場合に対応するためである[55)]。

7．象の寄贈に対する返礼

少年団日本連盟は，1935年１月頃，象の返礼として２案を検討していた。シャムのルークスアを象と同時に来日させる案と，連盟の練習船をルークスアに贈る案である[56)]。

前者は，日本側が旅費を負担してルークスア11，12名を招待する案である。この段階で象は1935年３月中旬にバンコクを出港する予定であり，ちょうどこの頃，満州国皇帝が来日する予定であった。満州のボーイスカウトである童子団も同人数程度を招待し，さらにシャムのルークスアの帰国途中に満州を見学させようという計画だった。しかし，この案をこれ以上，検討した形跡はない。

後者は，この当時，シャムでルークスア・タレー（日本における海洋少年団，英語ではシースカウト）を創設する動きがあったことに関連している[57)]。1934年に日本の海洋少年団が練習船で東南アジアを一周航海した際，シャムにも寄港してルークスア関係者も連盟の練習船を見ている[58)]。このような事情があり，少年団日本連盟が返礼として練習船をシャムに寄贈する案が浮上した。その内容を外務省の資料に基づいて整理すると，以下の通りとなる。なお，シャムに練習船を贈ることを協議したのは，外務省と少年団日本連盟海洋部であり，海洋部長の原道太は，全国の海洋少年団の指導的立場にあった。

1935年２月６日，原は外務省を訪ねて，練習船をシャムに贈った場合，外務省として代替船を準備する資金を用意できるのか確かめた。それに対し，外務省は金銭的な援助はできないと回答した。その後，原は「和爾丸寄贈ニ関スル要綱」を作成し，練習船の改造費が6,700円，シャムへの渡航費が15,000円と見積もり，その結果を，外務省を通して２月15日にバンコクの矢田部公使に伝えた。３月３日，矢田部公使を通して東京の外務省に，シャム側からの回答が寄せられた。それによると，シャムとしては財政的な理由から，練習船を改造せず，日本からシャムまでの廻航もシャム側で行いたいと伝えてきた。このことが同月７日に原に伝わったが，原は５月28日付で，この回答には応じることができないと判断し，練習船のシャムへの寄贈を撤回した[59)]。

以上の交渉において，少年団日本連盟は，シャム側が練習船の譲渡を希望しており，この件に関してバンコクの矢田部公使から連盟海洋部の原道太に連絡を入れたと理解していた[60)]。この点に関して，在日シャム公使のプラ・ミトラカムラックサーも以下の文章で認めている。この文章は1935年２月７日，在日シャム公使館がシャムの外務省に入れた連絡である[61)]。それは補足説明を加えると，次のような内容であった。

> 少年団日本連盟の練習船である義勇和爾丸の船長で，昨年８月に東南アジア一周航海の途中に日本の海洋少年団員をつれてシャムを訪問した原が，シャムと日本の友好の証として，シャムに和爾丸を贈る用意があると伝えてきた。この件は，在日シャム公使であるプラ・ミトラカムラックサーが，暹羅協会の総裁を務める秩父宮雍仁親王に口頭で依頼していたことである。この船の件に関して，シャムでどのような交渉や準備を行っているか，私は情報を持たない。シャム側が練習船の寄贈を要求したかのような態度をとったことにより，日本側はシャムが何か見返りを期待して象を寄贈したと考えているようだ。できるだけ早い内に，シャム外務省としての指示を仰ぎたい。

プラ・ミトラカムラックサー公使は，練習船をシャムに譲ってほしいと秩父宮を通して少年団日本連盟に伝えたことを認めている。しかし，これ以降の交渉の経過は，日本側の記録と異なっている。上の文章を含む文書がシャムの外務省に伝わった翌日の２月８日，シャムの外務省は文部省に，この件の対応を依頼する文書を発した[62)]。１週間後の同月15日，文部省は外務省に回答した[63)]。それは次のような内容であった。

> 文部省としても，ルークスアとしても，船を譲ってもらうには準備不足であると考えている。このことを，外務省を通して東京のシャム公使館に伝えてほしい。加えて，原に対する心からの謝意，そして日本のルークスアとの友好精神と，互いに兄弟関係であることを望んでいることを伝えてほしい。

翌16日，シャムの外務省は在日シャム公使館にこの件を伝えている[64)]。シャム側の迅速な対応の一方で，日本側は練習船の廻航費用の検討などを行い，結局，寄贈をあきらめたのは，象が日本に来る前月の５月に入ってからであった。この間，日本では，象の返礼として練習船をシャムに贈るという雰囲気が醸成されており，５月14日の新聞にも「日

暹親善　贈り物に和爾丸　友邦少年の喜びや如何に　わが健児の魂こめて」などと大々的に報道されるに至った[65]。『上野動物園百年史』にも，「この２頭のゾウの御礼には，海洋少年団によって，義勇和爾丸というヨットがシャムに寄贈されている」との記述がある[66]。

日本側が練習船をシャムに寄贈する際の改造費用や渡航費用などを見積もっている間に，シャムは練習船の受け入れを断ると決めていた。この決定を在日シャム公使館が日本の外務省へ伝えていなかったのだろう。ただ，３月３日付の矢田部公使の文書では，シャム側がこの時点でも練習船を改造せず，シャムまでの渡航費用を支出して練習船を受け入れようと検討していたことが窺える。３月以降のシャム側の練習船受け入れに関する記録が残っておらず，シャムでの状況は不明である。

８．象の授受をめぐる国際親善と国際関係

当時の日本の新聞は象の受け入れについて，「シヤム少年団からの可愛らしい国際親善の贈り物」（大阪朝日新聞，1934.5.5，13），「日本とシヤムの小国民親善外交を長い〳〵お鼻で結ぶシヤム国の象使節」（東京朝日新聞朝刊，1935.6.4，11）など，シャム側の意図に沿った表現を用いて報道していた。

その一方で，1933年の国際連盟におけるリットン調査団の報告書の採択を意識した記事もあった。例えば「アジアのよき友邦シヤム国の少年団から日本の少年少女諸君へ親善の純情をこめて贈らるゝ二頭の象」である[67]。このことは，「例の国際連盟会議以来一層親善の度を加へた日本とシヤムである，わけても皇帝を団長に戴くシヤム国の少年団とわが少年団とは幾回もの交歓によつて固く結ばれた大の仲良しだ」との文にも見ることができる[68]。もちろん，1933年の国際連盟におけるリットン調査団の報告書の採択を意識してのことである。新聞記事は日本と並んでアジアで独立を維持していたシャムが棄権したことを想起させ，そのシャムから象が贈られたことを述べることで読者に対し，特に日本に友好的なシャムという印象を与えることになったと考えられる。

また，1934年10月17日，シャムの新聞「バンコクタイムス」が，シンガポールの新聞「ストレイトタイムス」の報道を引用する形で，1888年に５世王が日本に寄贈した象の後日談を掲載した。外務省に提出された報告書によると，この象が「精神の異常」のため四肢に鎖を繋いで身動きがとれないようにして20年来放置しているという内容である[69]。この記事がシャムに「悪影響」を与えると心配したバンコクの日本公使館員がバンコクタイムスの主筆に面会した。大使館員は今回の寄贈が「国際友情ノ発露」としてのシャムから日本への申し出であり，東京と大阪両市が象舎を新築し，シャム人の「象遣ヒ」を雇うことを説明した上で，バンコクタイムス紙上にこれらの説明を掲載することを求めた。

本稿の冒頭で，チャルンパッタナーによる象の寄贈に関する見解，即ち，1932年の立憲革命後の政府が，旧来の国王を中心とする国内外の勢力に対抗するため日本に接近し，その一環として象を寄贈したとする考えを示した。確かに，仏領インドシナと英領ビルマ，英領マラヤに挟まれたシャムは，王政時代から近代国家を目指して欧米各国から外国人を多く雇用していた。そこには日本人も含まれており，養蚕業，女子教育，美術，建築設計，医学，経済学などの分野で活躍していた[70]。

立憲革命翌年の1933年，国際連盟でリットン調査団の報告書の採択が行われ，シャムはヨーロッパ，日本，そして中国との関係を意識して棄権した[71]。英国とフランスの植民地に挟まれたシャムの領土，シャム国内で経済活動に深く関わっていた中国人の存在，日本がシャム産のコメの輸入国であり，安価な日本製品の輸入の増加による日本との経済的な結びつきなどを勘案した結果，シャムとしては中立の立場をとったのである。シャムの国際連盟における外交を検討したヘルは，リットン調査団の報告書の採択においてシャムが実際的な判断を下したと指摘している[72]。リットン調査団の報告書の採択において棄権したシャムを，日本はとても好意的に受け止めていたが，ヘルによると，シャムはそのような日本の受け止めに当惑していた[73]。ヘルは他方で，シャムでは1930年代には日本の外交施策を賞賛する軍事エリートが台頭し，日本がシャムの外交政策において最も重要な国になったことも指摘している[74]。

本稿で検討した象の寄贈は，シャムにとって，あくまで従前のルークスアと日本の少年団の交流や，それによる友好関係を念頭に置いたものであった。そのことは，バンコクの日本公使館も確認していたことである。もちろん，ルークスアと少年団の友好関係の継続を期待し，そのことが両国の友好関係にも寄与することをシャム側が想定していたことも考えられる。そこには，日本を含めた諸外国との等距離外交を維持しつつ，同じボーイスカウトという起源を持つルークスアと少年団を通して，日本とは一定程度の友好関係を維持し続けたいというシャムの

思惑があったと想定できるが[75]，シャムの公文書を読む限り，シャムが象の寄贈に対する具体的な見返りを期待していなかったことがわかる。

また，チャルンパッタナーは，日本の新聞記事の分析に基づいて指摘していたのであり，当時の日本の新聞は一様に象の授受を政治，特に国際連盟の脱退の件に結びつけていた。しかしながら，本稿で検討した公文書等には，象の授受と，国際連盟を脱退した日本とシャムの政治的な関係に言及した文言を見いだすことはできない。

９．おわりに

２頭の象は1935年５月18日，バンコクで大阪商船会社のばたびあ丸に積み込まれ，日本に向かった[76]。６月３日，神戸港に上陸した後，それぞれ汽車によって大阪の天王寺駅と東京の汐留駅に到着し，深夜を待って天王寺動物園や上野動物園まで徒歩で移動した[77]。

本稿の冒頭では，1940年前後のヒトラー・ユーゲントとの相互交流においては，当時の国際状況を背景に日本とドイツの双方に国家の思惑があったと指摘した。その一方で，シャムは1935年の象の寄贈に関して，一貫して両国の友好親善の象徴を主張していたことを，本稿で確認した。この点が，戦前の日本の少年団の国際交流における差異である。

さて，シャムのルークスアが日本以外のボーイスカウトに象を贈ったという記録は見つかっておらず，1911年に設立されたシャムのルークスアの歴史上，象の寄贈は日本に対するものが唯一であったと考えられる。1900年代前半において，日本の少年団とタイのルークスアが，イギリスやデンマークで開催された世界規模のボーイスカウトの大会に派遣される機会はたびたびあった。これらの大会に，日本は派遣団を結成して日本から渡航させたのに対し，シャムはそれぞれの国に留学中の学生を参加させた。他の国や地域との１対１の関係で見ると，日本は朝鮮や台湾，そして満州を除けば，アメリカの日系人組織とシャムだけが交流相手であった[78]。他方，シャムによる日本以外との２国間交流は，1937年にアメリカが開催した大会に招待された機会だけであり，このときもアメリカに留学していたシャムの学生人を参加させた[79]。このようにシャムは日本以外の外国派遣には留学生を活用していた。日本との交流でも，1929年のルークスアの来日は日本側の招待だった[80]。その返礼としてシャムが4,500円を拠出して，1930年末に日本の少年団を招待した[81]。以上のことから，シャムは自国のルークスアを自前の資金で海外に派遣したことはない。1930年末の日本の少年団による招待と，1935年の日本への象の寄贈が，シャムのルークスアが外国との交流において比較的大きな金額を支出した機会だったことになる。

本稿に続く，今後の課題は次の通りである。第１に，本稿で扱った象の寄贈を踏まえた上で，1929年から1937年にかけて実施された，シャムのルークスアと日本の少年団による相互交流の実態と，そこに込められた政治的意図の解明である。本稿では，1935年の象の寄贈が，シャムにとっても日本にとっても，相互の友好関係の証であると説明されていたことを明らかにした。果たして，その前後の相互交流においても，同様の意味があったのか。何らかの政治的な意図があったのか。チャルンパッタナーによる立憲革命後の政府が日本に接近したという見解は，第２次世界大戦前におけるシャムのルークスアと日本の少年団との交流において，具体的にどう解釈できるのか，さらなる検討を進めたい。

このことを考える上で必要なのは，シャムにおけるルークスアの位置づけである。既に６世王（在1910-1925）期におけるルークスアの社会的な位置づけは圓入が説明しているが[82]，続く７世王（在1925-1935）期のルークスア，あるいは1932年の立憲革命以降の，ルークスアの位置づけについては，ほとんど解明されていない。本稿では言及しなかったが，立憲革命がシャムのルークスアの組織体制あるいは指導方法，諸外国との関係において何らかの影響を与えている可能性がある。以上が，今後の第２の課題である。

１）上野動物園『上野動物園百年史　本編』1982，168-182。

２）大阪市天王寺動物園『大阪市天王寺動物園70年史』（1985）には「ランプール」と表記されているが，元のタイ語により近い表記としては「ランプーン」が適切である。

３）在京タイ大使館発行の冊子『日本で会えるタイの象』（2009）には，1917年にタイで生まれた「花子」が1935年に来日したこと，シャムの少年団が日本に寄贈したこと，「両国の親交をより深めることに繋が」ったことなどの指摘がある。

４）圓入智仁「1935年にシャムから来日した象の受け入れ　少年団日本連盟と上野動物園・天王寺動物園の対応」『日本社会教育学会紀要』No.49-1，2013，11-20。

５）例えば，以下の文献である。Edward Thadeus Flood, *Japan's Relations with Thailand: 1928-1941*. Ph. D. thesis, University of Whashington, 1967.

Thawii Thiirawongseerii, *Samphanthaphaap thaang kaanmuang rawaang Thai kap Yiipun*（『タイと日本の政治関係』），Thaiwattanaaphaanit, 1981 (Phoo. Soo. 2524). Suraangsrii Thansiangsom (ed.), 380 *pii samphanthamaitrii Yiipun-Thai*（『日本とタイの友好関係380年』），Sirilak Songsreemsawat, 1985 (Phoo. Soo. 2528). 石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』講談社，1987. Edward Bruce Reynolds, *Ambivalent allies: Japan and Thailand, 1941-1945*, Ph. D. thesis, University of Hawaii, 1988. 村嶋英治『ピブーン』岩波書店，1996. 矢田部厚彦「1930年代日本外交の屈折―日・タイ関係史の一断面　第２回　友邦シャムに訪れた革命の波」『外交フォーラム』15(10)，2002，88-95。

6）西野順治郎『増補新版　日・タイ四百年史』時事通信社，1984，86。

7）Supaporn Jarunpattana, *Siam-Japan relations 1920-1940*, V. R. F. Series No.159, Institute of Developing Economies, 1989。

8）大串隆吉『青年団と国際交流の歴史』有信堂，1999，131-150。田中治彦『少年団運動の成立と展開』九州大学出版会，1999，284-290。

9）大串，177-180。

10）スカウト運動史編さん特別委員会『日本ボーイスカウト運動史』ボーイスカウト日本連盟，1973。

11）圓入智仁『海洋少年団の組織と活動』，九州大学出版会，2011，170-171。

12）福田三郎『実録上野動物園』（毎日新聞社，1968），佐々木時雄『動物園の歴史』（西田書店，1975），『上野動物園百年史　本編』，上野動物園『上野動物園百年史　資料編』（1982），『大阪市天王寺動物園70年史』による。

13）家永真幸『パンダ外交』メディアファクトリー，2011。

14）本稿では主に以下の公文書を使用している。なお，日本の公文書に関して，各文書の主題が「シャム（暹羅）から象寄贈の件」など類似するものが多い。そこで，日付や文書番号で判別可能なものは主題の表記を省略した。

【タイ国立公文書館史料】

○ 文部省文書（Eekasaan Krasuwang Kaan Suksaathikaan）

Koo Soo. 3, Kaan Suksaa, 142, "Samnakgaan Khoosanaakaan-Khaao Ruang Kaan Song Chaang Pai Kamnan Luuksua Yiipun." 以下，「Koo Soo. 3, Kaan Suksaa, 142」と表記。

○ 外務省文書（Eekasaan Krasuwang Kaan Taangpratheet）

Koo Too. 83, Luuksua, 16, "Khana Luuksua Sayaam Hai Chaang Kee Khana Luuksua Yiipun." 以下，「Koo Too. 83, Luuksua, 16」と表記。

【日本外務省外交資料館史料】

○本邦各国間贈答関係雑件３巻・４巻，外務省記録・Ｌ門（元首，皇室，賞勲，表彰，儀礼，贈答）・４類（贈答）。以下，「贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４」と表記。

15）以下の文献を参照した。Sathuan Supphasoophon (ed.), *Phraraatchaprawat phrabaatsomdetphramongkutklaocaoyuuhua lae prawat kaan luuksua thai*（『６世王とタイルークスアの歴史』）. Roongphim khurusaphaa, 1961. Chaiwat Panyaa, *Phatthanaakaan khoong kaan luuksua thai tangtee phutthasakkaraat 2454 tung 2528*（『タイルークスアの発展　仏歴2454-2528年』），M.A. thesis, Chulalongkorn University, 1986. Phrayut Sitthiphan, *Luuksua sii phaendin*（『４代の国王のルークスア』），Khana koong bannaathikaan noo. soo. phoo. ruamkhaao. n.d. 圓入智仁「タイにおけるボーイスカウト運動の成立と展開　ラーマ６世王期（1910-1925年）」『アジア・アフリカ言語文化研究』66，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2003，53-73。村田翼夫『タイにおける教育発展　国民統合・文化・教育協力』東信堂，2007。

16）Vella, Walter F. 1978. *Chaiyo!*. The University Press of Hawaii. pp.xiii-vi, 260-262。村嶋英治「現代タイにおける公的国家イデオロギーの形成」『国際政治』84，1987, 118-135. Murashima, Eiji. "The Origin of Modern Official State Ideology in Thailand." *Journal of Southeast Asian Studies*, XIX(1), 1988. 80-96. Greene, Stephen Lyon Wakeman. *Absolute Dreams*. White Lotus. 1999. 171-174.

17）Anderson, Benedict. Imagined Communities. Verso. 1991 (Revised Edition). [ベネディクト・アンダーソン，白石さや・白石隆訳『増補想像の共同体』NTT 出版，1997]。

18）村田翼夫「タイの国民統一と宗教・道徳教育」筑波大学教育学系比較教育研究室『第三世界における国民統一と宗教・道徳教育』1987，53-78。

19）Ministry of Education. *A History of Thai Education*. 1976. 39-43. Waarunii Oosathaarom. *Kaansuksaa nai sangkhom thai phoo. soo. 2411- phoo. soo. 2475*（『タイ社会における教育　仏歴2411年-2475年（西暦1868年-1932年　）』）。M. A. thesis, Chulalongkorn Univeristy. 1981. 389.

20）村嶋『ピブーン』，70-73。

21）以下の文献を参考にした。上平泰博・中島純・田中治彦『少年団の歴史』，萌文社，1996。田中『少年団

運動の成立と展開』。圓入『海洋少年団の組織と活動』。

22）臼井茂安「暹羅少年団訪日旅行日記」『少年団研究』6(11)，1929，17-22。

23）暹羅協会，少年団日本連盟，東京市「昭和十年六月八日　暹羅国少年団　寄贈象歓迎記念」（1935年６月８日に上野動物園で開催された象の授受式で配布されたと思われるパンフレット）。

24）彼は1900年から1907年までの英国留学中，同地に留学中の数名のタイ王族と出会った。７世王が即位前の1924年に訪日した際，その王族の要請で７世王を接遇した。1927年，大倉は７世王からタイに招待され，爵位を授かった。沖田秀詞「在タイ『日暹協会』設立秘史（前編）―戦前のタイにおける日本の外交戦略瞥見―」日本タイ協会『タイ国情報』47(1)，2013.1，147-155。

25）二荒芳徳「暹羅少年団招待状」『少年団研究』6(9)，1929，44-45。「暹羅」とはシャムを表す当時の表現である。

26）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012420900（第26画像目），本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雑件／暹羅協会関係（I.1）（外務省外交史料館）。

27）「日本タイ協会について　沿革：日本タイ協会」，nihon-thaikyokai.go-web.jp/tabid/91/language/ ja-JP/ Default.aspx（2011.8.16アクセス）。

28）「暹羅少年団ヨリ象寄贈越ノ件（十, 一, 十, ）」，贈答関係雑件 ３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

29）JACAR:B04012429900（第３画像目），各国少年団及青年団関係雑件 第一巻（I.1）（外務省外交史料館）。

30）寺岡一義「シャム派遣団日記」『少年団研究』8(4)，1931，16-25。

31）Krasuwang Thammakaan, Thii phoo. 130/473/2477, 13.3.2477/2478, Koo Too. 83, Luuksua, 16. プラ・ミトラカムラックサーのルークスアにおける地位，文部大臣との会話の内容等に関する詳しい記録は入手できていない。

32）Krom Phonsuksaa, NT, ND, Koo Soo. 3, Kaan Suksaa, 142.

33）昭和９年４月14日広田外務大臣宛宮崎代理公使発第46号，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

34）昭和10年３月30日広田外務大臣宛矢田部公使発第102号，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

35）昭和９年５月４日文部省内少年団日本連盟理事長伯爵二荒芳徳宛天羽部長発，贈答雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

36）「暹羅『ボーイ，スカウト』ヨリ東京及大阪動物園ヘ象寄贈方ノ件（九，五，四）」贈答雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

37）昭和９年５月３日大阪市長関一宛天羽部長発，贈答雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

38）「暹羅少年団ヨリ象寄贈ノ件」贈答雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

39）COPY., memorandum, Koo Too. 83, Luuksua, 16.「覚え書」『動物園飼育録　昭和十年度』上野動物園，1935。

40）赤木攻「国旗」日本タイ学会編『タイ事典』めこん，2009，137。

41）暹羅協会，少年団日本連盟，東京市「昭和十年六月八日　暹羅国少年団　寄贈象歓迎記念」。

42）昭和９年５月８日在暹宮崎代理公使宛広田大臣発第41号，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。昭和９年５月11日在暹宮崎代理公使宛広田大臣発第45号，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

43）Copy No. 2309 Received on the 14th May 1934., From: Imperial Japanese Legation Bangkok, 12th May, 1934., To: State Councillor for Foreign Affairs, Re: The contribution of elephants., Koo Too. 83, Luuksua, 16, Krasuwang Kaantaangphratheet, Thii Ngoo. 18/2738, 19.5.2477/2478., Koo Too. 83, Luuksua, 16.

44）昭和９年５月14日広田外務大臣宛宮崎代理公使発第67号，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

45）「シャム少年団ヨリ象寄贈ノ件」，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

46）昭和９年７月16日広田外務大臣宛矢田部公使発第97号，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

47）公第106号，本邦各国間贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。『上野動物園百年史　資料編』，592-593。

48）シャムの鉄道局が象の輸送を検討した記録がある。Krom Rotfailuang, Leekthii phoo.4/13/4405, ND, Koo Soo. 3, Kaan Suksaa, 142.

49）「シャム少年団ヨリ象寄贈ノ件（九，五，十）」，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・Ｌ・４。

50）「大がかりな平和使節の上陸　シヤムからの象クン神戸着」大阪毎日新聞夕刊，1935.6.3，2。

51）別の新聞は，２頭の象の名前と年齢を「ランプーン嬢（十九歳）とバンレイ嬢（二十一歳）」と伝えている。「シヤム少年から　贈物の巨象届く」大阪朝日新聞，1935.6.4，2。

52）Krasuwang Thammakaan, Thii Phoo. 110/2477, 11.1.2477/2478, Koo Too. 83, Luuksua, 16.

53）Krasuwang Thammakaan, Thii Phoo. 134/503/2477, 3.29.2477/2478, Koo Too. 83, Luuksua, 16.

54）写真の説明文。*Luuksua Sayaam*，14(5)，1936（Phoo. Soo. 2479）。

55）「暹羅ヨリ象寄贈越ノ件（十，二，二〇）」，贈答関係

雑件３・４巻，外務省記録・L・４。

56）「暹羅少年団ヨリ象寄贈越ノ件（十，一，十）」，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・L・４。

57）Naritsaraanuwattiwong. Prakaat Sapaakaammakaanklaang Catkaan Luuksua Haengsayaam Ruang Kaan Cattang Kaan Luuksua Somut Seenaa（「ルークスア・シャム連盟発表　海洋ルークスアの設立について」）。*Luuksua Sayaam*. 13(2): 85. 1934（Phoo. Soo. 2477）.

58）圓入『海洋少年団の組織と活動』，170-171。

59）JACAR:B04012444200（第81-108画像目），本邦少年団及青年団関係雑件（I.1），「本邦少年団及青年団関係雑件　２．少年団関係（3）海洋少年団ノ南洋遠航関係　自昭和九年三月」（外務省外交史料館）。

60）「暹羅少年団ヨリ象寄贈越ノ件（十，一，十）」，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・L・４。

61）TELEGRAM COPY NO.29/17140. From: The Siamese Minsiter, Tokio. To: The State Councillor., Foreign Office, Bangkok., 7th Feb. 1935., Koo Too. 83, Luuksua, 16.

62）Krasuwang Kaantaangpratheet, Thii Ngoo. 46/19185, 7.2.2477/2478, Koo Too. 83, Luuksua, 16.

63）Krasuwang Thammakaan, Thii Phoo. 124/428/2477, 15.2.2477/2478, Koo Too. 83, Luuksua, 16.

64）TELEGRAM COPY NO.26/19603. From: The State Councillor., Bangkok, To: The Siamese Minister, Tokio., 16th Feb. 1935, Koo Too. 83, Luuksua, 16.

65）「日暹親善　贈り物に和爾丸」読売新聞朝刊，1935.5.14，7。この記事には，「両国の親善を表徴する意義ある贈物をしたいといふことはかねてから日本連盟で考へてゐたことだつたが，こんど日本少年の魂ともいふべき和爾丸を永へに両国少年を結ぶ記念として寄贈することになった」とある。

66）『上野動物園百年史　本編』，131。

67）「シヤムからの贈り物　千貫の巨象」大阪朝日新聞，1934.9.18，2。

68）「日暹親善　贈り物に和爾丸」読売新聞朝刊。

69）「情一主管暹羅来信機密第一七五号写」，贈答関係雑件３・４巻，外務省記録・L・４。

70）石井ら，146-153。

71）同上，251。村嶋『ピブーン』，200-202。矢田部，88-95。

72）Stefan Hell, *Siam and the League of Nations*, River Books Co., Ltd., 2010, 201.

73）*Ibid.*, 205-211.

74）*Ibid.*, 194.

75）国際親善を目的とする外交はありえる。例えば首相の訪問外交の種類として，①国際会議，②親善訪問，③具体的案件のある訪問，④その他（外国の首脳就任式やオリンピック等式典への出席，首脳の死去に伴う国葬への参列など）がある。池井研究会「戦後日本の訪問外交　首相の外遊を中心として」慶應義塾大学法学部政治学科ゼミナール委員会『政治学研究』29，251-268，1999。

76）昭和10年５月20日情広田外務大臣宛矢田部公使発第139号，本邦各国間贈答関係雑件３巻・４巻，外務省記録・L・４。

77）圓入「1935年にシャムから来日した象の受け入れ　少年団日本連盟と上野動物園・天王寺動物園の対応」。

78）少年団日本連盟の機関誌『少年団研究』各巻各号による。朝鮮，台湾，満州に日本の子どもの少年団があったと先行研究は指摘するが，満州を除いて，現地の子どもの少年団については不明である（孫佳茹「『満洲国』におけるボーイスカウト運動の展開（1932-1937年）」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』18(1)，2010，33-41）。

79）既出のルークスアに関する先行研究による。

80）Phra Sanaaphochanapaak, *Paathokthaa Ruang Luuksua Phai Yiipun*（『日本に渡ったルークスアに関する講演』）. Roongphimsoophon phiphatthanaakon, 1929 (phoo. soo. 2472), 1-2.

81）JACAR:B04012429900（第24画像目），各国少年団及青年団関係雑件　第一巻（I.1）（外務省外交史料館）。

82）圓入「タイにおけるボーイスカウト運動の成立と展開」，53-73。